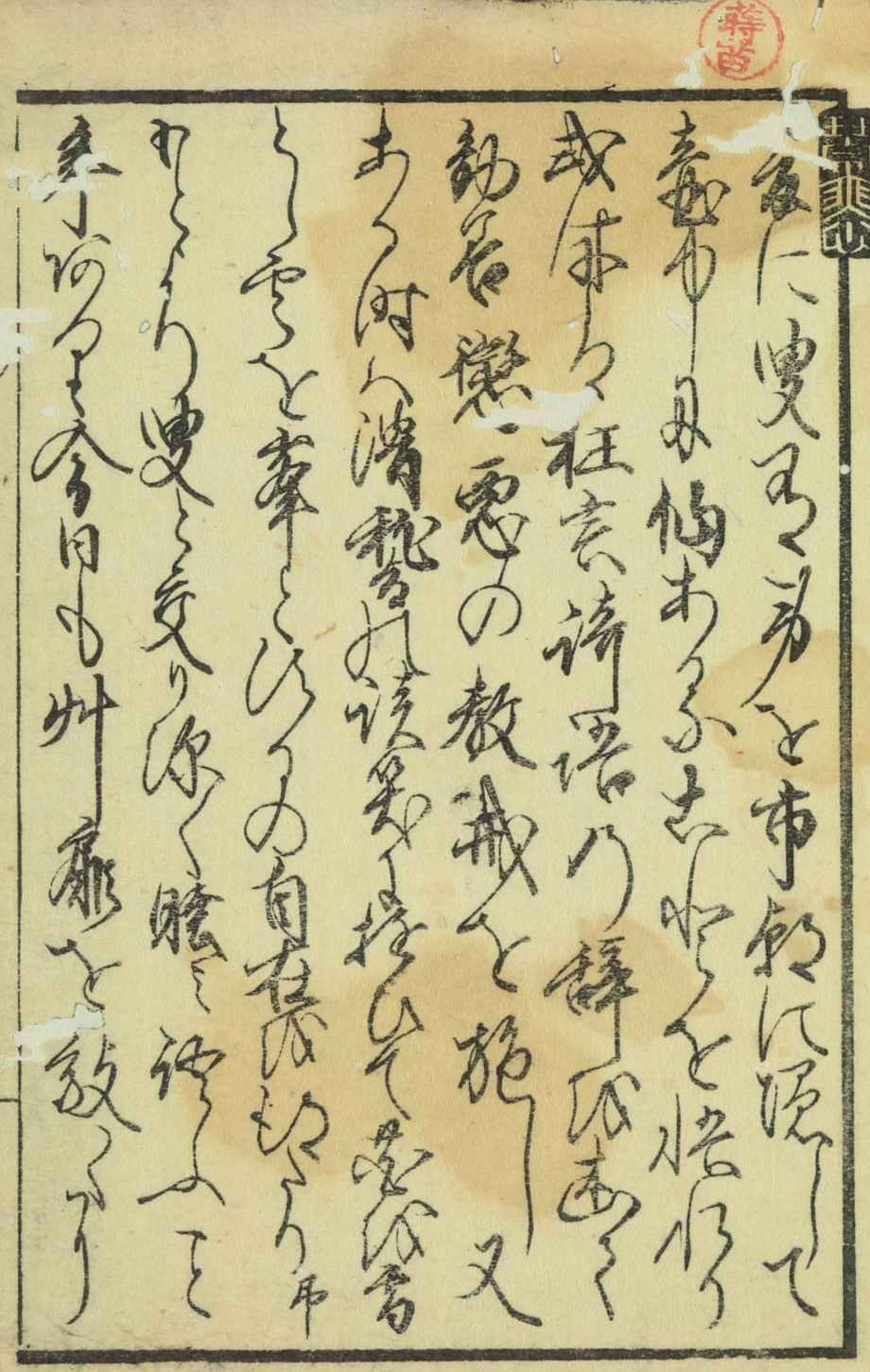
誹諧通

並木舍五瓶撰

誹諧通言完

東都書肆



[illegible]
一書あり宝暦[illegible]文字[illegible]
[illegible]未[illegible]人書[illegible]をなさるれ乃
住吉[illegible]未[illegible]僅乃異紙[illegible]
黄[illegible]初[illegible]書[illegible]少[illegible]
武蔵中[illegible]白[illegible]
[illegible]感[illegible]筆[illegible]
永嘉亭波静

並木宗輔一座狂編里
題しして俳諧通言と呼ぶ
是を見るに之都は遊里の
古さを今ふ年中乃行事迄
わすれぬ清さ小男鹿の筆に

命毛長き夜の惜しき哉

このき集めし俗を張良の胸の

長の世をくれぬし迷ひ良

相応人左右の一物を秘せる

晋子堂　凡雄敬

通言序

姿高うしんとすれは言葉ぶし

艶なるは哉もゑ迷ふ人ハ

うしなふ人の通言を粉回し

老純ハ楚里入てことゝ年寄

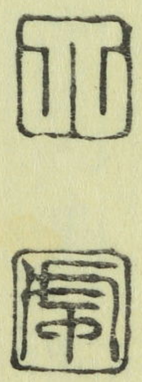
もふ法こう年若人ふう砲しう
たゝうう年思ふ事もあんなきハ
とゝうの都のこゝ駿職むの
秘密ハ世ひうの事とハなし
ゝゝ大宛濃のかゝるものハ

八俵を意ふ蒙ハ是ともも思ふ
扶の恢秘と世し駿河の信との
男の変事事変ものを分て
判官及ハ新変ハそのことをふ
象習をんと世ゝ物ゝは兼者

五籟うたゝ憐とゝ是亦俳諧の
滑稽也

文化三丙寅歳序小華堂にて書ハ

江源寿大師

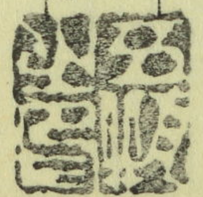


自叙

今也俳諧者流の巨匠たる者獨貴色を開き
無てなり買色ハ何をいふ娼家の光景をいふ
也然まるも其一風の好士事實名称を
詳にせる故ゆ句作毎年齟齬杜撰すること
かゝる樗櫟にして笑ふ色き事ハ
常ゆ此道を好て世活乃障を悟るも
おうなる宮大生来乃一癖といふ色にて

今此編集ハ僅二の一筆也四才の諸君
子意を留て熟覧、城郭の眼前の立里
雨霧忽晴て路ヶ繁徳の雅境ヶ入る云
晒茶乃風韻ハ其言の趣くとと絵ヶ出
る一然法ヶ彼捧腹する者雅哉
嗚呼

文化丁卯陬月　　並木五瓶誌



凡例

一　賣色の国ヶ也ハ摂三郡の廓および大坂為の国京
祇園町ハその辺りのありさまをのする洛東ハ祭
洛の内地蔵祭洛北の稲荷祭東ハ花街国の
事小あり祇園その日を紋日とする也京ハをのする

一　季節の中ヶ一ツ〳〵市をもうけ江戸ハ江戸
京洛ハ洛西大坂新町ハ浪中因幡の国ハ浪南京

雅楽寮所ハ洛東ニ多有り是を見り

三位の廓源氏物語の内源氏雅楽寮所ハ洛西の中ハ

時ハ移りの流りて変化せるもあれハ芸妓流云財義

の数人の世ハ唯古よりハ人ハ生る酒を集めるのこと

素小説の花樹花名を表すハ是も夢多の酒

よりこと用ゆるもあれハ歌まを追加まる詩歌

ハ位よりを補ひ後小編こと編をるすのこ

誹諧通言

人倫

並木舎五瓶著

都嶋原（洛西）

左丈 昔の白柏子とふるものありし能金盛の須磨能をもこもとこ
葉なる由へ左丈と名付又始皇帝の故ゆ小て松の位と **天神**
よりハ祝者り和あり恵じて勅女我拾女とふ所和歌拾遺
むりハ式價は五文ありし由へ日緑日小表して神と **遊女**
いとこもこ千家よりて林の位とよりなり
左丈天神ハ茶屋へ出せ出事 **廉恵** 左丈と神とこもこ
楊の茶屋して茶屋へ由へ名あり 恵ゆる仲ありむりハ
図と出しゆ物ゆ茶小源ゆして小雅廉我拾遺 **新艘** 世上小嫁ゆ廉
ちるんより廉恵とふ別ゆを廉の位とふ 新造とふ

文字表して彩艘と云ハ彩き毋ふ様にして
艘ハ彩ーーよ揚屋まで婚礼の式あり
あれハ格式ふとぎくろう 臺所娼婦 古文にて神自身よ之法を
遠ふなり 浮名四ケ娼婦を呼ふ 局娼婦
招娼婦 きさむき 小向 あるひハ西の 引舟 古文に付古文いたる紅小表
遊女なり 安娼婦なり ひきふね ーーー繋ぎる紅のんふく
それを四ケ四ケ引舟の名 兎 大内女の寄宿際まで髪きり紙
あり勤ハ世ぞ内流なり 兎髪といふ故ーー娼婦の寄ひりの
なり代内より古文天神招娼婦 壺手 娼婦の仕付をもて
文くの紙量をかるなり 役法の海さるの
を立掛くかー廓とちぢひ高系ふ
ふいるび古文の乳母 花車 揚屋の妻女を
風流を尽し花やふ盃の出りく
ふく資を四ケ花ぢはと云あり 志八 庵ちて娼家又孤老と
八ふ故て仏法の廓でも娼

婦屋のゆを 卸 廓中かる籠の寄場
形りふなり 客人の中客をりふく
名ふ中ハ廓の 同浄瑠璃娼妓 義太夫宮薗節をぶんん
法度なり 浄瑠の義太夫なり 大夫 客人
あるもと代廓ふ 素敗 大通小付流れ酒れ
ハ古代ふふる 中衆の無を指男なり 乃夫 娼婦
男廓ふ限りるふ 客人の方へ 娼婦より客人の方へ
客のうちるも代名あり 妓 娼婦 客人の方へ
屋敷 出口ふて貸編笠の第屋
あり今ハ形斗り残りあり
同祇園町 洛東 素人 素人とふ流れ花やふ
素婦 土六 素人の使のゆ
あり 鼠 形りふ彩地安年
素人と分る説あり

年詰 年増の中詰けれハ若き女郎のうち成りふ 若詰 振袖しく新造のる芸子なる

色事し武家あり此里の芸子を芸子ハいつ川てしあし 芸子 さまぐの事まで外里とちかひ至る調付物ごし人様ぶ応

首芸子 近年げいのよいのよいのと悪さの 碁盤人形 子どもの よいのをわめる首とりふ 葉子なり

山猫 是ハ東山料理店ニて よぶやまげいこなり 女なり

起番 右料理店の内より出てよりづく 毎晩泊まに客の用を達

女郎芸子芸公人でなく 仲居 茶屋まで座敷の 女なり

親の内より出るをりふ 見世賃 是も別に店て 勤ふいづるなり

公人 素人より出ふ 女郎ふ成るをりふ 子飼 稚き時より雲まし子抱 親出す 女郎芸子ふ仕立るも 月入

抱女郎芸公人を元抱ふ 色容 女郎の腕すぐれたる 涼み 六月涼の比女郎 そのたり其里の入口かれ まさき客あり 芸子女男

流年ふ河原へ 廻し男 女郎芸子の送り迎をする 幇間子 連あるりなり 男あり其身も内の子を揃く

廻し男面改時 太鼓持 大津屋大坂屋の人世より出て入用 代りぶり女なり 役者の声色まひの寄なり

茶屋女郎屋へ 亭主 茶やの料理人 板元をまる 出入の調理あり あるじ 男なり

江都吉原（江吉） 太夫 其名傾城なり昭暦元禄のころ より中頃して今ハ此位なし

散茶 是を今ハ 昼三 むかしより名高き女郎 花魁 おもて茶屋へ出る 呼出 女郎

全盛 梅茶 是を今ハ 座敷持 此中より働き 部屋持 あまたハ昼三ふ至る

新造出しなり 局 大内女の居ぶの名なり 新造 先哉 ちもとハ新造、
ふいくゝ いさとでハ ちゝとハ 又姉女郎が仕立て
女郎の居ぶを局といふべきを 寄かてい河原の女郎を局と云 家
別造出しハ ふハ家と遠ひ 乃るゆ郭くの格式あり 禿 后 三 禿義務の者ひりの者 二人り
禿 寛永年中新丁中近江屋 仲の丁へ出るゆ二人禿をつ 廓かゆ行く 盛りの 二人り
禿 男の子 寛永年中 場立禿 いまゞ六七方より 若禿
遣手 悪しく女郎新造禿の 雇禿 後日お日ふ
捌ふんなきひまをきふ役 迎ゆ座
牛 又ハ 妓夫 代と成りふル出 全ハ於て半を 若者 をかぼく
代りを 武陽のうけり

客の意 男子 女郎者 上方の 男郎者 長も上方く
ゆ捌く男なり ふゆ 男なり
地回り 迎より入 徒婦 不義の女 戒の力ゆ廓の勤 高
ら ま い 義回 いかし 揚屋のあるまし 時く 女郎の 取具 義務 拵
祇づのむん 男揚屋 ゆ上ていろ の面白き曲 拵なせ しゝ
不寝番 若者の間引ケ 寝ぎ ゆいて 武陽中の行燈の 女郎
油をつぎ回り 又用人の 柏子 なぎて 白る男し
勤 ま 人の 入 勇 廓へ入迎む 門番 女郎 忘 便り屋
上方の行入 判人 続 廓の 八の ゆ
廓の奥使 大門口廓の 太堤 武陽 太堤の 者人
形 締 改 後人なり
考 紙 人 お升 ○ 髪結 ○ 茶屋の亭主 女房 先ゆ 入

おかしきものの
沢を累ねたり

浪花新町（浪中）左文 廓中女郎の上にかたをかまへ立ねまかせ
撰ばれ職かまさなり故小老人天神 法ゆ浄瑠璃と同格左文か
ゑ位の出息女といはれも駄ず つまづき揚屋だろう第六
出世代位なれも上中下こうじん 小て神 中の位なり 見世天神 謂女郎若年
之限りなれ 小日傘 長かさ 廓中おそい彩の要りかかり和氣
為てふかも柄なり 廉子 位代廓おそい彩の要りかかり和氣
女郎 價下出そ 彩造 吉原流系同一格なれと代廓か
紋紋の家 引舟 彼の廓夕暮より連始る今かゑ 兎 他不と遠ひ代もの
なれる者り 先か出格式なく

揚屋より呼び迎ふ来るふ 臺所女郎 享保年中より 瓶子 始り
ふかハラウ〳〵やしきく 臺所女郎中絶日〳〵なり
瓶子 始る京と 左関 指 関の号呂利彩左の流を伝へ左関
同〳〵なり 秀吉公のお伽より始り左関を指とふ 仲居 代廓でハ始ての客人か左文を かりて
いふく呼出一堂をまもる長を加り 弁とふ又左文の名代
揚屋へかゑ志八へむひふ沢 指ふハ和桃灯を持なり 半文 代廓中小
てハたを 弁慶 判官か付歩り 出 指なりなり 艶男 故て若き
まし〳〵なり 色男なり
同嶋之内（浪南） 伯人 代里かて い素人とハ出ず 素立 文
同〳〵伯人 伯人とふ女郎の越名なり
女郎の女郎の女郎の 鬢撫女 長ハ風呂桂の女郎の沢要〳〵廉の紅ふなり 瓶子

娘と年公人ふとぶち 古撥 義古史義云子
二ヌあるなり のるをのるなり 仲居 前新の神居ハ猶ほ
雁仲居 別小世帯を持ち家を
の用を又と紀伊とにあるなり 男 祇園所と 都
脇 此里でハ
用とあるなり 空拍子 女帝を罵ず呂色所を お山 の熱
名女を物山とよぶハ神代の故なり 男こ
とあるなり 拍女乃事なり 鄙人 合
里別の田舎 釋 法麦と法師ふ
者をいふなり よひ人をいふ 拍子ハ拍ける状の
又いふ 大通
なるなり 京釋 ○ 拍子 又高京 月 拍を用ひるなり
のり此外をきるハ 月 ハ
後幕ふあるなり

神釋

春

浪中 浪南 愛染祭 正月元日天王寺梁塵へふらえびす
ゆふてりふをまれふ事なり 十日恵比須
正月九日十日大坂中の拍子の
大坂日今宮虎出ゆふて事なり 洛西 童子祭 又第合ゆふなり
洛東の中の社の
噴霧神事 正月十七日十八日の祇園廓中の男女残らず
紙鑑冊ふ古あ 祇園冊ふ祈ゆへ事納
ゆふ先キの古あと云ふ事を噴霧と云ふ筋紫宮事府ゆて
響の神事の中極びなり 正月ゆ星 法喜入地獄
洛東 御忌 正月十七日より廿八日まて
祇園所大坂日 衣物を改る 御菊稲荷 正月廿一日
の石燈の ふ祭を
下ふあり 江吉 恵比須講 正月十八日より廿日まて
丁所家ゆて日ゆ喜ふ 太神楽

二月初午より三日迄廓中にて初午○九郎助稲荷新町の稲荷
ゆゑ名言なし〜繁昌す
板倉稲荷江戸町　昭石稲荷同町　伏見稲荷京町
吉徳稲荷廓外五十間ほかあり　此日五丁町とも懸物を立て
小挑灯を点し〜賑〜しくにぎやかなる
洛西　菓種供二月廿五日　浪南　汐干三月三日
仕吉条　雛祭三月
役日あり　洛西　壬生念仏三月十五日より廿四日まで花法びとよび
大役日法人〜にぎやかなる
東寺法会供三月廿一日　江吉　三社祭三月十八日浅草三
役日なし　社権現のまつり
雛〜き
役日なし　夏　洛西　蓮華祭四月酉の日か
蓮華の役日　仏生会四月八日
寺〜条　浪南　灌仏四月八日
仏の誕生日　洛西　住吉御祭四月十九日
まつり廿八日
まて中者ち村住吉明神の神輿を出し〜下の町迄練り
廓中より体為餓鬼ほか〜出し〜旅〜法人毎日見番ふ
くんじ出る為なり　浪南　御田四月廿八日住吉田植の神事
拍子廓外へ出るなり　板橋宿の大役日祭〜異
乳もの抱女市女笠にて田植ふいろる古例なり　勝鬘供養法会六月初の大阪中条
法四天王の大役日
祭〜形下
乃中あり　江吉　富士詣六月初の浅草富士詣乃
条丁の大役日旅〜〜〜
集まる
なり　洛東　祇園御霊洗六月初の日
なり　祇園御霊会六月十日
過まて御霊を舁出し法五を
〜ぐ京中一廻りなり　同祇園会六月十日
十八日長刀の

祇園社 浪南 八幡祭 六月十四日より廿日迄の間地祭り
廻へ伯人藝子祭り有り出る 浪中 稲荷
祭 六月廿九日廿日迄天皇陛祭り廓中氏子廻へ
祭り有り出る又他所より俄を拵て揚屋〳〵の座敷
へ出る〳〵 但し南瓜紙ハ 天神祭 六月廿日より
毒虫を送る所〳〵へ送る人多し 五日市 彩子
為の内〳〵金銀糸紙幣と共に張り付〳〵川中へ流し
数万の挑灯蠟燭の光花火紙ぶんぶりかぞへて日々一の座敷
御殿 六月廿九日廿日作吉の大祭り
法花の色町役日まて座〳〵

秋

七夕 七月七日之
加茂同断

江吉 四万六千日 七月十日浅草観音
京廓中 参詣〳〵大盛
蛍市 七月十日昼ヶ七ツより仲の町へ
立ち座〳〵出る廓中より求よりの時分市

新造竜宮つふあさひ 七月十三日法人宿 洛西 大文字
〳〵ひるかり 紅日地蔵 七月十三日の廓中へ 洛東
七月十六日京中色 七月廿日の壬生寺迄室町
所大役日ふて見物 地蔵祭 七月廿日の地蔵
千日参 七月十日六波羅〳〵 浪中 七月廿九日夜
廿四日豊岡〳〵 洛東 千日参 七月廿日夜
天王寺千日あかり 青物市 七月十二日十三日彩子通筋小松屋の
寺〳〵まつり 伏見の只せを出る江戸吉原の仲市迄
放生会 八月十五日所の 江吉 燈籠 七月朔日より毎日
八幡宮へ参る 家毎ふ仏の為ふ仲の
町へ出る 俄 八月朔日より仲の町かく〳〵男女の義去
初りひ〳〵 ふきらまを見る 新集 洛西 六
孫亟祭 九月十日小 醴祭 六月四日の祭り役日
役日五中五

久〻

江吉 恵比須講 十月廿日月次

洛西 洛東 清水講 十月十五日

立花造物 十夜 十月十四日子年家の金式 作家も同しく

洛東 祈言文掛 十月廿色所の

法華人事中の所を掛ける巳年通り祇園の内藤木が得

井屋へ参る是を湯谷正後といひ諸人の祈ひ式日能安法

商人群集する是 我講 延仁寺町夷の社へ 浪南 浪中 神送り

十月朔日神〻出雲の方社へ 浪中 金式 十月十三日 夜

法出雲社へ参る日なり 浪中 金式 十月十三日 夜

十月十四日 祈言文掛 浪南 金

あそばれるとゝゝしんなるなり

晃屋祭 十月十日生魚長小屋 作家造物 法華

講 ○十夜 化所と同し 祈言文掛 十月廿日 我の社へ参る 神迎 十月

神〻出雲へ 洛西 洛東 清水焼 十月

祇園清水焼 十月廿一日

午の日なり宮〻 浪中 事始 十一月十三日

ちうふまつりなり 大役日なり 浪南

節分 所の氏神へ ○生海鼠長の内兄弟 新町通の内

参詣 生海鼠長小屋若者大勢一組宛

左敷紙を拡きうごろうちい内ふう生海鼠長の内兄弟

とゝゝ〻〻立ゝ〻参詣あげや 表にまて踊あゝ〻〻つゝ

ちの拡ぬ〻〻おい〻〻大坂い勿論 海苔の色町も

右の通あさ旅〻〻きゝゝ 河ふゝ〻〻〻〻

須ゝ所の夜九りるとゝ恵比須 大我若恵比

ゝり歩りゝゝ吉農納ゝゝ 江吉 釈迦市

十二月十七日十八日浅草市正月の 庭火 大晦日の夜より火
錺をかざる戌日 吉原 大かん八日より 女郎屋の庭に焚く
常燈籠 年中夜分庭に灯す廓 通ひ神 女郎の身乃
中男女諸祈れの為 射目に如く
乃雅弥のものり参らく参の為 貞累尾 正保の頃角町菱屋
浄がなく廓へよふの為之 及半左衛門抱の仇気
保といひし女郎名高きの抱の身 自生尾 享保の頃の吉
まかりし後剃髪して尾と成る 菱屋彦門兄心
廓を出て世を観し 浪華に 萩原清妻 寛文乃
草庵を結びいりしといふ 浪花 頃新町
通り筋新屋といふ女郎屋かり家あり元日の 妙林 乃廓
雑者に錦あり 数を入し より 難波 当 所
妻を指剃髪ありて勤後に 観音裏 難波新地 西口 浪南 お
天王寺一心寺に伴 庵を結ぶ

京さの 楊枝 住の宮住吉に御の玉の木よりて縁結の神あり
女郎の宮かくし縁ある女き楊枝一対を男女まけて
所持すれば夫婦となる也 自安寺 妙見 ○ 同稲荷 乃兆
女郎芸子さへ参詣す
境内に目ちまきあり稲荷の社あり境内
にあり女郎芸子参詣す 洛東 主夜神 三條のひがし
檀神に社あり祇園町 目疾地蔵 同祇園町より
の舞子女郎信仰す 参詣多し 鷲山
妙見 祇園町 参詣多し 浪南 又次力 住吉表の天神の
きる女の対じ 江吉 念仏屋 江戸町壱丁目女郎屋あり
めに参詣多し 武家の様に女郎新造 元
お忍びまで仕舞あれば茶屋の檀那せんもどの元トもそ
突出し人念仏を唱さすが若し夫婦へ念仏九度とよぶ

世之常

縄塚　津の國神崎郡の中ゆりいかく流産上人ゆ仏
塚　教の人なり後ゆ〜文戒を彫ひ上人膝に接ひた
まへ八年夜の人の怪女あるゆ神崎門へ所を深め空〜く祭る
里人死穢を恐れ上げ葬りつる所なり
て今ふかり三枝ゆまづれ〜
年なれど席ゆ変ゆ来るに

夕書塚（浪中）　寛文年中ぜんせんと呼ぶ今ふ
人も来つる扇や夕ぎり塚あり大坂十町
淀寺ゆあり延宝六年午正月六日病死

井筒屋　こ去

佐渡屋　西町井筒屋抱へ井筒勤の内ゆ死まかり〜あの格
名法名を去る〜生涯吊ひ〜と去て時代伴ゆ〜
三勝墓　乃妻城子日ゆあり元禄の比舞子京屋三枝
大和の傳蔵屋来七といふりのと仏中せ〜を

岩井来ゆ良家舞妓芸屋ゆ〜て初去ゆ〜て大ゆ大解ゆ昌
奥右の石碑ゆ芸石産年来ゆ良論を建て今ゆ

尾蔓（江言）　高
三浦屋二代の全蔓人の能者つる女郎ゆり墓ゆ
古ゆの乃哲ゆ乃ゆ小ゆ乃ゆ〜ゆ名ゆ〜ゆるゆのり

宋女塚　寛文の比堺町屋金屋の女郎名副の亀客ゆ細ゆて
乃重屋の梧子先ゆ〜接ゆ来るゆ夜宋女吉ゆ成
ゆび出淀茅ゆ宗徒の池（いて）ゆ刀ゆを殺元〜ゆる
和の者死穢ゆ葬り塚ゆ徒ゆ池の通りゆ築く

濡髪小

静　見ゆ乃文の比江戸丁玉屋の抱ゆ〜毎日髪ゆ洗ひ水髪
ゆて勤せ〜ゆ右の長名ゆり後ゆ大病殺〜年服の上利
髪〜て尼と成て

誰哉　時暦の比江戸丁目西田屋抱乃
流行ゆ出〜ゆり　女郎雅哉ゆ夜門四ゆ扇ゆ
ゆる乃ゆ〜ゆ者ゆも知れず彩嘉ゆ及び空〜ゆる和子ゆ
祢ゆ後の月ゆの乃比時より廓中ゆ行性を出ゆ

是も別宿或は燈とまんじたまきく名号今ハ絶セたり

万字玉菊 正徳年中角町中万字屋の金盛蓋ふたのおく廓中の男女玉菊をそしむ人多く皆ハ有愛がらせ女郎なれと月ハむ〻重き姿と風のふ病と病者ハ死合せ憐しや秋の始ハ十万俵出へ揚屋入りせ〻あそそろ多ハ人皆憐〻かれ〻せめてハ近者の為祥月なれハ廿七月より仲の町へ燈籠を出し諸客入込廓の繁昌是也玉菊ハ毎年燈籠を出し諸客入込廓の

猫塚 是ハいかに〻猫を葬り秘義せ〻猫を葬り〻所に角ハ葬ハ廿日ハ猫なりとあり揚屋町の名ハ廿日ハ猫塚ありといひ所不詳

八ツ橋 元禄の比角町中万字屋の抱出て仕の伝のひたる方ハて教害を廿日紀ざ〻と云者八ツ橋を招むるあり〻中の了簡や伝法治作ハ〻〻籠治羅とい之

心中 男女たがの之実を云ふ事をいふ

衣類

仕着 正月元日衣類表裏ハ仕立て出ス

同二日着 沖さ名刷のあとりハ

三日着 三ヶ日の御りあるハ女郎の流行

揚屋着 自分ハ揚屋ハ

絞屋着 昔ハ付の名物あるとハ

絞帽子 今ハ絞付の帽子の形りを絞て仕立て出ス

新町綿 是も新町ハ女郎を云ふ今ハ流中洛外の女郎を云ふ

五重襦袢 襦袢の事〻ハ

揚屋着 女郎伯人等ハ

仲店 郷諸細又ハ紅白の帯之

そ御忌小袖 正月御忌の内とく祇園町ハ花見をもて 衣更 卯月より是迄を夜着小袖を合 菖蒲帷
す 子 五月五日の 涼揃 六月すゞみの内見せしくのはゝ子 汗手 あせて
拭 綿呂縮細小くゝ 是も合せ派手なる帷子を着る 上方のけい
絽ゝ色さくの種類 白帷子 縮緬洒小さく云角 提帯 さげまはり
子女郎禿小巾着のきく 古金襴 何屋町懐紙 湯しもの角を
おさへて着るを撚へ禿小抹ゝる是を並らして袴まゆきもりの 鬢兒
世揃 是も見せしく云合せ大縫甲斐の 額かむり 紫ちりめん
染裹 袷衣を揃へ新見合せ初日か見物に出る 袷
なり 縮衣 袷裏 伯人女郎座人の時 包 かの縁まぐ衣裳を
の衣装衣を包む是を着して 男 茶屋まで来りてこ 包をし風呂数初年
おえこ出す事まゝつゝ乃紋 襴帯 座入のときはかる 鏡
えんく帯なり

袋 女郎藝子懐中して 新町にて 財布を延かへのいれ物
客人のよふ京之徳よして筏の門手銀の合具付 女郎
化粧乃色を 仕着 正月元日宝三方蒲揃 新造
入くゝ揃なり 江吉 かむろまで同様より揃へいたす
二日着三日着 いかまも自身小揃へ 若松揃 禿の仕
かしえ分 何の所へ手礼に出る 着せい
のまへ 扇屋染 是も禿の形に着 古揃の潔揃揃なり 衣更 ○ 菖蒲
帷子 是等ハ知まて 浴衣 夜の浜小ハ女郎より客へ傳
女郎てを 八朔白無垢 八月朔日元禄の頃江戸町二丁
まし通 目巴屋高橋といふ女郎 その頃瘧を
まづらひ いくりしが 保く名到し 客人皆の約束日へ 巣やへ
来りときて 白無垢の侭 来しく 仲の丁へ出し 澄花の馬も合

なるの風情人皆感歎せしが例こゝにあり八郎が八幡白髭社に今が仲の丁へ

仕者 十二月年の暮ゆかるゝ外の新道発ゆ拵こゝ熱して年中の拵入れそのおりんよりまかのゝ〜ゆるの他所と遠江式

廓の拵式見繕当の出化

夜着○三ツ蒲団 又ハ蒲団 見も女郎の女郎の金盛ゆゝ餅屋を割あり客よりすれば二階外へ蕎麦を銘り家こゝ係こいろ〜の拵式あり見を表初こりこゝ表拵ゆるもあり

実出し ハ内絵

より拵て出るもあり

器財

洛西 **芝鍋傘** 支拵屋入屋中の拵さしらげる 秋方宝後外の傘形て作ふ法

江吉 **長**

揚傘 青糸八女郎の後外よりとは別

浪中 **日揚傘** 拵式絵糸 月別あり

江吉 **駒**

下結 中古角丁義や 美蓉ちゑ

洛西 **古支下結** 黒ゆり二ツ歯こゝ〜〜ち係三筋町の時より始る

浪中 **吾妻下結** 宛文年中見も 易吉屋吉妻始る **箱提灯** 揚屋より約束の表行屋の表を迎ゆ行時拵あり 形て〜ちんは拵をそゆず 揚屋の提灯 九郎 拵て行が例なり古れ京古後と同別あり

町揚屋中屋ゆ竹生西和 行絵の形ゆ〜家〜ゆあり **種ケ島** 阿波産彩絵町位よりや

花の井鬘 九軒町揚屋行吉屋吉屋〜方ゆ〜り見ハ〜ゆ〜〜

能因法師の秘剣ゆ〜義あり能因年の〜ゆ

見後と **重紙** 絵化帖巻ゆ〜画書包 **金張の圓扇** 見も

極ゆり 日支ゆ拵絵を入ゆり

左大臣非 夜の道ハ扇子ハ書ます
昔のとほり書翁をほうよかなり
町へある時筆屋の門口に並べく是を方に
ありき流手花やらあるをいうらんあるし
様ありなり是ハ中古流の登對あるといふ女郎
好き姫今あるまゝの廓の流手にわたるなり
三味線○尺八○鼓太鼓 此外く何事ても
廓ぞの品をあり
○長持○風箏箇○衣桁○香具○煙草盆
是ハ八女郎の客人の待ちあひ立流あり元家より送是ハ客の役
付又自分にする是ハ自分の役付蒔絵金具も真流に是外の廓
の雛女にあたるり吉原の金
比翼蓙 夜の臥構るのふとん
紫に限り流手かさねなり のよふ少なく二ッ折まてく

(江吉) 大釣挑灯 女郎の役付 紅燈仲乃町
大扇子枝 四月松の内待の町人あるに売に
琴○鼓弓○箏箏箇

中をかくる由へあうくとはふ登りハびろうどちのめん 枕 まくらかけあり
ようりもいまなおあおうるなよくござといふ 床の間掛
屏風○火鉢○帆立貝 名副の客人にハ是まそ拍筆あてかう
榾○花活 此外く花次小く是まそり 菅笊巾 二組不彩
誂や揃まくまこそ東柏年る 道具の拵
雛傘 元吉原の時分より用ひし古き中元禄の頃の
手角ら客夕是人の都ろ和也へ至らくまと 曙篭 あと
しかるとも又八 猪牙船 又八山谷通ひ元禄の頃の勘文来ると
山谷かよくにふ いふ若初く来りしい此る船凡ハ是千石を
いう是を暁謹 誰哉行燈 其丁所示ま 灯を
まくちうきよふ 譯ハ女房の部屋あ灯を 田面節
燈 廓外用心の為ち燈に灯を 仲の町の茶屋まて
田の面を照らす由へ此名あり 鬼雄磨 四季とも出ける

洛東 線香箱 京橋菱屋町浅草寺の内にて伯人婦子花
浪南 線香一本を一枝と称し花枝の如くなれば
仕必花枝の多く線香一本を一枝と称し花枝の如くなれば
必を表る異なり 三味線箱 三味線の箱なれば
包こと男芸者へ指 提灯 武八時代きれ
運ふ気子の乱々あり 提灯 小田原提灯の形みじ〻一風
と縦ゆ世提を 提灯 紛羅
入まる袋あり
提灯 三枚屋町八幡宮町方 浪南 武蔵眉刷毛 けやきの
襷折揚枝 江戸表にも用ゆるあり 吉原揚枝○新町揚枝○
原揚枝 女郎のきゝみ

廓所地名

洛西 越後屋○上の町○中の町○下の町○右
丈町○揚屋町○伊賀町○揚屋 十軒ばかり
角屋 位ちろい 葵屋○忘八屋○小向 中堂寺町の
ちき家なり 女郎の住あり 出口
名代 柳屋 さらぢ垣○衣紋橋○丹波口○紫雀楼○西
口○和車通○蓮塚山 廓中伯者天神の 遊女墓
不知 出口が這入口の 社後の山を称す
面白を形りん 洛東 祇園町○切通○辻子 新宿

[illegible]を出す踊場 祇園町の東の方にあり 目病過 四條定仁寺町のすぢ地蔵堂あり

祇園新地 松原町茶屋の町 富永町いろは茶屋 見世 伯人義子の居所 [illegible]

置屋 高台院女郎屋なり 呼屋 同じく茶屋 [illegible] 家所見世 [illegible]

の者合屋新し 貸座敷 色々の者合屋なり 縄手 ○石垣 ○[illegible]

町 [illegible] 一力 祇園町石屋なり 角九 同じく 井筒 同じく

白水 [illegible] 引地 同じく 富田屋 ○ [illegible] 一徳 祇園町[illegible]

[illegible] 踊場 [illegible] 山科 [illegible]

江戸 [illegible] 江戸町 [illegible] 堺町 [illegible]

名斗り [illegible] 角町 ○ 揚屋町 [illegible] 京町 [illegible]

新丁 [illegible] 伏見町 ○ 侍の町 [illegible] 七軒 [illegible]

入口七 [illegible] 侍合の辻 [illegible] 西河岸 ○ [illegible] 西河岸

丁までの [illegible] 水屋 [illegible] 大門口 [illegible]

洗場堀 [illegible] 西河岸の [illegible] 五拾間道 [illegible] 家敷堀

家中 [illegible] 紋を出す [illegible] 孔雀長屋 [illegible] 門徒 [illegible]

見番(けんばん) 男女の藝者をさばく所なり 青市場 中の町中 見返り柳(みかへりやなぎ)

ゑもん坂に 五十間より郭 編笠茶屋(あみがさぢやや) 郭外左右にあり

ありしといふ 駕宿(かごやど) 三谷堀より郭へ客を送る 田町にあり

キの字屋 郭中料理仕出し屋を云 盃見勢(ひつこせ) 九ツより引まで 女郎見世へ出るを云 夜

見勢(みせ) 並べるより引ケまでをいふ 籬(まがき) 見世の格子をいふ 妓有屋(きうりうや) 中店の

名代 ...

茶屋(ちやや) 客を取る ...

座敷(ざしき) 内二ツの座敷 ...

廻し(まはし) 座敷 名代の客を ...

遣手(やりて) 部屋(へや)

芸子屋の ...

[浪中] 惣名新町(そうみやうしんまち) 東口大門(ひがしぐちおほもん) 瓢箪町(へうたんまち) 今ハ是を通筋と呼ぶ 越後町

越後町(ゑちごまち) 通り筋より南の町なり 佐渡嶋町(さどしまてう) 葭原町(よしはらまち) 阿波座(あはざ)通じといふ

西小通りあり 新京橋町(しんきやうばしまち) 新堀町(しんほりてう) 九軒町(くけんてう) 又九軒とも云 廓(かし)

西口 大門(おほもん) 是を出れバ 砂場あり 佐者横町(さうしやよこまち) 通筋より壱丁西の横町也 より見世を出し春秋に太夫

東りく女郎見 杉子掛(しかしげ) 新京橋町へ遣入 揚屋(あげや) 十二軒あり 越

あまたの客 茶屋(ちやや) 筆新 小茶屋(こちやや) 置屋も新在く 茶屋(くつちや) 遊八屋

ト二階造り 花街あり 置屋のやり

女郎屋の 藝子屋(げいこや) 此廓に限り藝者置 いあり

子のある家をいふ 稲荷見勢(いなりみせ)

浄瑠璃浄るり臺改掛の見せけいと唱とい唱あり越中橋越中橋の西材屋又武者絵の
町杉本氏の住ありと呼唱へ越中橋屋入り左中小路人口の西鮮
魚屋なる唱へ唱村屋が裏口小路を入れ唱ら橋や一名し
旧沢山屋浦忘八茶屋や章魚と
あり山屋浦忘八茶屋や章魚と
りふ実伝りの名あり松屋茶屋通筋表中やと
名来ありしが今はなし橋屋茶屋是も通筋彩屋法華宗寺
今はなし橋屋茶屋是も通筋彩屋法華宗寺
俗の墓場の西隣なり菅沢
俗演劇の西町うらうら茶屋の中程俗の像踊場通筋南側七月盆
夜の踊は常見唱小路あり踊場と
あり踊場通筋南側七月盆
夜踊りしが今絶て名計なる炭火見世村元禄年中近江屋小路焼
く火事の屋敷なり女郎の新
を見せしが今では一編の焼場屋
世見世を作るる花やふふりしかり売風呂九軒町西
風呂あり

おく酒家ふむ世あり是小路西鶴
ちぐ連立入るるるるるるるる稀しるるるるるるる小の門
の門出張すぐ出る新町橋西橋延宝年間名あり九郎門出
左吏徒出され廓を出る祝儀揚や忘八やの往ひ侍茶女郎と
堂のと左右へ行ハ茶ふふ茶屋中遊る他法あり
浪南題名鶴の間○沸前町○笠屋町○六軒
町○塗師屋町○家左衛門橋筋
○中橋筋○八幡筋○三津寺筋○亀屋
女郎屋の題名あり風呂様額風呂様風呂を外ひまま
呼屋茶やの

そのほか此例芝居恵比須講太茶屋　街の内にて名ある茶屋太鼓持
茶屋までも色杯まで
もまたあり　金屋色よりの出合茶屋　鶯籠屋　三條の筋女郎の遊りなり
むかしの鶯巣なり
小夜格子　女郎屋の一座　女郎藝子一とつ座敷なり　嵯峨
格子をいふ　座敷にて
女郎藝子同し茶屋なく　仕習　江戸ていふ　祇園　京大坂
ふとき者へを勤る者なり　がくの者なり　おそくふ
都て　窪間　又江戸表にて　廓新ゐ文川ぶ　洛東　川端　浪南　濱
是等を　吉原で　流しの藝
例　江吉　川岸　右の通三都おなく　ちまちに違ふなり
座敷のき者へ
座浦奥

都て京大坂にて正月中まての　万歳　二上り　松盡　二上り
寺小屋藝子の繁盛の上なり
相逢　本てうし　高砂や　三下り　玖月　二上り　十日恵比須
須三下り　十二月手鞠歌　二上り　洛西　揚節　明暦の比柏や
の縁日といふ善兵衛女郎　手鞠曲　此廓の新遣売く手鞠
唄ひおどりぶるなり　を作くふ妹を作て下りけり
さんく上へ手をうけて宴よきる者　聞ましよく　中秀のさき
言語に渋しく上手なり
いきふ藝子たりとも此ちたるも者にるを　柳子ハごと
ぶでしつまると渋き手て一番なり
ぢやく　是も右のとおり　柳子太鼓笛の役人をきり絶
さいまそうちまそとあいしその小酒を王にはさなり

馬うり　是も事跡詳ならず

きとりする女郎　美声なれども男ひ〜ぶり

由氏さとの名物の一つとする者世れ

紙ひ　浪南　鶴屋節　○園八節　京都の宮家　屋節

姿も事新しく　浪中　松嶺節　万治年中まで

流行唄　拳　伊勢屋　知恵くらべ　中拳　指ゆびを出す手　狐拳

ちりんとうらうらけん　是ハ南世ちから　機門の座敷　酒盛時

図〜る　黒丸拳　是ハ食やわらべ　花唄　年〜来る〜　江戸　つぎ節　ほうきの

絵を仕組ふ　丸て花ふ　古堀節

是も素人の口　河東節　中古江戸の名妓　丸て向上ありし　虎拳

ゆき知ぬ　ちやぐん　芸者揚歌　舞踊　又ハ

とよ〜ふり　茶番　芸者　手妻　ぞ皆酒の肴ふり　見世清　楊く

ゆ〜ゆ〜家　遠ハ　外廓ふハ　ひ人の家を引ち

花やうさ　ちかぎり　きの　ふ

書体

洛西　祝儀帖　正月元日　ちややの

日掛帳　正月の絵来の日　ひ　を　二ヶ形の　ふ　紅葉

少　ちの　名　名　ちの

別元日より二月初午まで　女郎の方より

日掛　日を　ぶくろ　名　名　ちの

名も云こより　名の　を　ひ　合　男

ひきびあり　を　形　人　ひきびさ

起請文 二世の契りを結ぶ中の誓ひの文言 血を絞りて誓ひの文言 古代のまこと

追状 念仏おせし中の縁を切

浪中 夕涼 扇屋ゆふぎりがを絞揚やゆふぎり 客人をめば扇やか 元よりせんせる

掛あわして 第八ちり 文手紙 甲斐の国の石を滑し揚やより廓中の石を文手紙

石の数句なぞを自筆ゆえせし流るる 俳表紙のいとろくろ 入壺 色若

年ゆえて彼方を人銭別して去ゆえの石の数の名を壁に彫りハいろく

浪南 花山帳 女郎の愛する花の数 第盃を記す盃の起

ふてゆあるしるのちり

通八 色ゆ陀仙を二ツ折り先きの第盃の名前なを出し盃

盃より ゆゑ送りし 女郎義経子の花数を出き数立日

判を元ゆえ第ゆ第ゆ人の動定ゆする由 さしがみ 巻紙 結て盃盃が

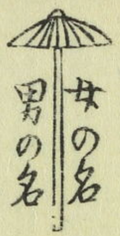
乃遠のなきふゆ花数の判を元盃くなり 形造実出し

女郎義経子勤ゆ出る時ゆ第盃中へ彫る出付なり 初入ゆ切ゆ名越

紀まゆれゆいろくの誓れる女郎の動ゆ代れるゆ出もなり

相合傘 色ハ落出ゆ女郎義経子の色男と二人りの名を

供出ゆして情愛の義経子女郎色ゆ出なり



形のちりなり ○ 袖結 ○ 附 振袖又ハ結

郎ゆ名到の色ゆ袖を結て ゆおそろを付させ出ゆ出ゆ

おへ結ゆ出ゆ赤剛飯を紀る胡麻塩包ゆ

俗やの俳と 夏書 花伝仏出る佛の名号を性ゆ掛書く

出を名を紀出 卯月八日より七月十六日を毎日為ゆ出

つと 江戸 たを尾が敷 三浦屋の金鑒初代ゆ二代三代人のよく出

なる 結束なり文より 長く氏名お続なり

揚屋巻紙 昔揚屋のゆ時ゆ揚や客人の別の上

法度の出ていなき格子を認めおゆの女郎

の紙方一送る切手なり今ハ
志ハ撰び出へ代るなり

附届の帖

名簿の客人外の女郎屋
の方より名刺の拍子をもつて先きの女郎へ
届の帖を出し客人を呼りて
同じ

てまへ偽

元郭の氏江戸町一丁めの若菊屋の奥別とも
金盛大和樹お桃灯小右のやく出るしき中を
大切ふ勤メ

禍の元

是ハ室永の氏新町山谷の猪山寮出
の時禍か自身かく妹脊山流々川乃
舞永こけてそいとぐ袖ハぬれぬるとき
金糸少てぬ也是ハ是ハ

客帳

女郎毎日毎晩来
るし帰〳〵亟芸妓初八きしやくなり客人の名を志
是を書人まへとなり

年季證文

是ハ他國より心色町へ
身を流る女の活状也
活の時ハ此後文を渡すなり右の外ハ後朝の帖名刺しいろ
客ふハ目帖あぞ〳〵ハ略し又ハ書ハ略の帖也

時刻

江吉 送り拍子木

楽の人を拍子木ハ〳〵送る是より正徳の頃まで男達入迄ハ郭内
送り拍子木ハ〳〵送る是より小西正左ヱ門建板体
より七ツまて拍ハ九ツより号さ
是ハ付ハ〳〵号の時の拍子木を打ぞ九ツの後を
号の拍子木を打ツ三ツ号ハ九ツの時を
なり伝て氏郭ハ拍四ツ〳〵ケ号の名あり

足袋出しの絵

夜足せを出す時の志〳〵ふ
女郎屋ハ〳〵ハ絵なり

時酒

酒盛の初盃を立る時を
おり形を吹ハ常ひと後で
盃むなり

居續

氏郭ハ遠留とハ
あり

浸鮫

朝別まて
泊る事
両三日ハ外歳日も
泊る事

雲先に新のいかき高く仕廻て意の如し

いづれも三都たゝかひかゞゝのあり

（浪中）限の太鼓

式部の者ゝもゝ敵のまゝ此別を限りとして廊中を

太鼓をおゝ出るを

（洛東）揚前

（浪南）揚先

後日紙衣のちや

おゝ小大門をゝるゝ

紙衣小袖をなり

外の客々へ出ゝ居るゝ

紙迎

中半

紙迎

伯人女郎紙屋より

仕廻の帰り

仕廻ゝ

紙屋仕廻

四ツ泊りハ四ツより新まゝ

七ツ迎

紙屋迎

紙屋迎

紙屋迎

紙屋の紙衣小袖ちゝまゝ

紙屋の九ツ限りより

紙付

○

紙仕舞

義云子の迎ハ九ツ限りあれど紙あるゝ客ハ紙付

尺せ仕廻を客ゝ此の新まゝ

言語

（洛東）（浪南）

肩三日

元日ニ肩と云ふ

客ゝ客ゝ伯人女郎の

初対面

客ゝ女郎も

初対面

一見

初対面

一す

間

客ゝ客ゝ

外ゝ

客ゝの

女郎客ゝ

接花

辛ゝ箱

二ツ三ツ

立ツ

大さゝ

人ゝ振ゝ

生買

客ゝ

客ゝ

客ゝ

切合

女郎客ゝ

附迎

言語

あの時ぬ

芳迷 女房同士芸子同士座敷ゆく張合ふ事

花詰 女房八越〻線香一本を一ツと極め價の高下あり

自芳立 女房芸子客かしさ芝居花見抽山ふ行くの時くのきまめあり

身京 手ぬぐいを

極悪 涼き色男なり

濡雪 人をもやまるなりつきあい

附合 云通ふなるの

不好 いやなもてもをつふ

大不禮 ことのこと知らぬ新

真有 強の色なるを云

流 女房を通てはなるの

酩酊 大きふ酒酔

芝居 芸子花

嫋嫋 恋の有で

也あの連中てもかまふを

文彌 女房のるを

清玉 女房

江吉 初

二ツ目の女房中居

これはるるも時ぬめくを云なり

會 初くのを云なり

裏約束 二ツ目の女房を送りて別の何

三舎目 女房を云なり

振 女房の婦ふ

被持 女房ふ

結有 嫁のあるとなきをふ男女

居立 女房ふ

為下 二階より初を

知歌 女房の我まく

一國 女房の

をかもをそ
るかり 見立 あるかたの女房を
そこなふ人をあるか
あるものはそりか 似馬麻 たとへば
きくくのるもし 向人 むかひの家の商人
おさくくく 店帰去 あをを送り
別れの祝 浪中 主人 主人
りふ略 成方姉 長は先て祝を
こそもの 呼立 主人外の物
仕くく居る我やくくのあけやよりさいをくまるふ 兄のたもふ 主人
名を云くつ口より呼長ハ主人
借 物屋ふくく家くの主人を一組定呼よせ登せするうち
お方をたとる中居性を拙人主人の名をくひくく
呼出くを主をとる 掃 つゑきくふ 間 主 孫の主男あり
長をを主人ハくくを 又主ふもあるも

おすま世 廓中の女郎 店屋 あの呼るくく 口舌 身揚
初をりかより
○ 呪詛 ○ 浮氣 ○ 髪切 ○ 刎切 ○ 年明 ○ 振
擂 利遣ををくるふ別深の
あるふくのむ初座をりふ

年中行事

門松 京ハ大屋のまへ 西京ハ廓中門 ○ 彩所ハ左で 祝
おふふ戸ふふ陽る ○ 西京ハ廓中門 ○ 彩所ハ左で 祝
きあへまち 法の内
うぎり 松通 ○ 初午 ○ 涅槃 神釈の祝
きあへまち 法の内
うぎり 松通 ○ 初午 ○ 涅槃 神釈の祝

洛西 雛市 三月三日ひるまより廓中へ四条通か
ひる人形の見せを出せ又ハ雛集まる 浪中 花

市おもしろくやくしの比奉り節
揚山吹のなを荷ひ奉ると
桂をあらふ流を張り
なを又ふ事ふ張り　卯の花　江吉　花桂　賣家の門ふ
毎の形くさ　菖蒲　月八日家　菖蒲　月
月八日京大坂の廓中色町ハ勿論町中家のかりかりふと
さとふ傳ゝ卯のなを菖さ付くく出すあり　幟　餅　焼　三
たふ男子ある家　月の内松同苔ふ色筋（六出さ
く張く出さあり　浪中　男子あれハ裏ハ一幟をしてる　納涼
三ヶ月の比より吉原ハ　月七ヶ月より吉原を
中ハ町さ涼を取　洛東　大納涼　三ヶ月七ヶ月より吉原を
あとすぐ　紙屋町大坂日鑑
納涼　又十八日より　すぐ　江吉　燈籠　六月晦
七月晦ると仲の町く出を　洛東　大踊　昔ハ吉丈て和白人
吉ふ　浪中　踊あり　ゝ今ハ
月見　三都共ふ　菊見
京大坂ともに　出やうと成て
不ゝ人和あり　後月　三都共
同　玄猪　上ふ　洛東　顔見
同ド　浪南
世　高所ふ衣　煤掃　餅搗　三都共ふ　庭
の新ふ　同　洛西
幾　吉丈より　扇屋家　越　江戸中ハ
用て　至苔ゝ　江吉　塵燈　大晦日の
夜忘ハて
たゝ形り　○　此部三都共ふ　彼日物日形て

江吉　袖梅　正徳年中　最中月　巻煎餅　中の町竹
伏見町出て　賣伝
廓名物

村伊勢 山屋豆腐 揚屋町 山屋 甘露梅 中の町 菓やうかん製 あさくさ人へ ふるかりり

(洛西) 吉文白粉 上の町油たるべし 太文紅粉 同 水菜漬物 やうり屋人

(洛東) 香煎 紙屋丁 郭 貴仁 小町紅粉 同所 花屋 表屋

又也 清造花 同所 花屋 ありり 造花 同所 紙屋 ありり 紙屋所 同所 曼屋 表八見世 (浪中)

たいこ 吉文油 西口 廣高や 三嶋屋所 同所 平吾 加茂川 びんつけ

漫沢 西口 數屋 吉文 傍製 小菊紅粉 赤口 ふかへ又世 (浪南) 美顔香

宇右屋つ所 和泉屋由男製 いろは紅粉 同所 田中ハ 早新 吉文 鯛魚屋 ふかり

羊羹 宇右屋つ所 吉文屋製 此外數多有後編ニ出ス

諸國花街

丸山 肥前 長崎 下関 長州 稲荷町 大坂町 藝妓 宮島 室津 播州 遊町

柳町 筑前 博多 筑前 有磯町 乳守 泉州 堺 高師 同所

蛭子島 同所 撞木町 城妓 伏見 中生嶋 同所 紫屋町 江妓 大津

四宮 同所 古市 勢州 山田 青森 津軽 善知鳥 潮来 常州

敦賀 越前 三國 同所 新浜 越後 寺泊 同所

酒田 羽州　走金 志賀 日和山　末辻 南部 明川　岡崎 三州

蒲勒町 後見 二ヶ町　右はゝ博士出世漏れ高八浸編花又

是上古跡の部

江口 摂州　神崎 同所　鶉野 播磨　鏡宿 江州

浅妻 同所　野上 濃州

江戸本石町十軒店萬笈堂英大助蔵版俳書目録

○類題之部

俳諧發句五百題 春秋庵白雄房撰　小本二冊

同　新五百題 田喜庵護物撰　中本二冊

同　新々五百題 仝撰　仝二冊

同　名所千題集 仝撰　仝三冊

同　今人東風流 洞海舎涼谷撰　仝二冊

同　十万句集 仝撰　仝四冊

同　故人五百題 松露庵撰　小本二冊

同　續故人五百題 一具庵一具撰　仝二冊

同　類聚　八朶園寥松撰　中本二冊

同　今人五百題　八雲東溟輯　渉壁千輅校　小本二冊

此書ハ俳人五百餘人ヲ撰ビテ家風ヲ不問ヲ一時ノ人物ヲ集ル者ナリ

同　類題　中本二冊

同　古今撰　蕪庵蟹守撰　全一冊

同　新類題　六合庵万里輯　全二冊

同　萬題集　一名題砂子　冬至庵庚年輯　八雲東溟校　全四冊

世ニ流ル集多シ中ニ此ハ古今ヲ撰ル者ヲ以テ世ニ流ル名家風流家ヲ乃チ一時ノ人安ノ如シ先古人ノ句集ニ世ニ流ル者ヲ撰ル事ハ

同　狭蓑集　仁比多居雄嶺輯　小本四冊

俳諧田毎の日　桃隣大人閲　全一冊

同　言笛集　錦舎素柳編　笠栖素行校　横本二冊

今人發句集　禾木園校輯　全二冊

四季發句帳

白井七五三　卅丸大人輯　全一冊

○假名遣物

万葉用字格　春登上人撰　全一冊

對照假字格　長野美波留大人撰　懐中折本一冊

音便假字格　春登上人撰　小本一冊

○句集之部

嵐雪句集 一称玄峰集　全二冊
其角句集 坎窩久蔵撰　小本二冊
蓼太句集　全六冊
吏登句集　全一冊
巣兆句集　全一冊
完來發句集　全二冊
梅翁宗因發句集　小本二冊
太無發句集
存義發句集
獅子眠發句集

柳居發句集　全一冊
糂粉漁　甲斐艸九集之　全一冊
葛里句集　[illegible]集之　小本二冊
護物七部集　全二冊
乙二七部集　全二冊
饒舌録　元木網大人著　全一冊
三吟未來記　全一冊
俳諧寂志　春秋庵白雄著　全三冊
今七部集　冬至庵庚年撰　全二冊
今人附合集　禾木園校輯　全四冊

芳草集 同 全二冊

芦のえのころ 田喜庵輯 全一冊

○季寄之部

戀の琴 葦雪庵北元著 小本一冊

俳諧手挑灯 一名俳諧初心手引草 中本一冊

同 掌中小本 全一冊

俳諧袖鏡 寸珍一冊

季寄便覽 枚摺

ゑのこもち 横本一冊

俳諧通言 小本一冊

○文之部

新編俳諧文集 当時言名の人の文を集めたる 全一冊

俳諧變躰一覽 両面一枚摺

袖定規 表俳諧定坐変体之図 七部集その外古哲俳士の変化の言葉を言葉ごとに品別俳士の自筆を一目にみるべきもの 一折

俳諧礎 集艸初編

○掌中寸珍物 編者不詳 集艸にあるべき 集艸二編

掌中五百題初編

同 二編

同　三編　集艸三編
同　芭蕉發句集　集艸四編
同　其角發句集初編　二編　集艸五編
同　嵐雪發句集初編　三編　集艸六編
同　乙由發句集　二編　集艸七編
同　蓼太發句集初編　二編　集艸八編
同　集艸九編
同　集艸十編
同　集艸十一編
同　集艸十二編

同　新五百題初編　一編　集艸十三編
同　集艸十四編
同　集艸十五編
同　集艸十六編

古今撰
猶追々出刻

梅園日記

北静廬先生著　初帙　五冊

此書は元来書物の上に誤まれるものを正し古来解釈する義義を正し世俗の雑事をいとぐち本末あるを必究を挙て明らめ喻る寄書なり其一二を云て扱額を跋婦とし葉山子と麻蒔るとなる八絃を非たるものと為し第巻集の新説を釈し世説の相異を解し俗語俚諺の文字の説優古書の活法は仮出るものを定め庶土の伝説を孤考まで新色の考を修始欲し総て疑問を初快の書中にも和漢一冊有秘乃書籍を引用せられ古人生稲冠の昔より八十歳の今に到るまでくを玄まて是教を示す巻を収す結部乃秘匿を探り帝世の孫書わ[illegible]て[illegible]迄ることの九二冊修係二十修書あり巻第六以下翻て閑雅せんと以世に随筆雑考く書第[illegible]といふ[illegible]実[illegible]年筆紀中乃冠晃[illegible]

稼[illegible]

江戸書賈　本石町十軒店　萬笈堂英大助板